

的保证を希求する志向の根源は何ゆえであるのかを射程に押さえることによって、著者のいう現代日本家族の直面している課題に迫りうるのではないであろうか。「文化遅滞論」は単線的進化論に基づいたもので、多元的發展・変容を捉えきり得るのか気になるところである。

冒頭で述べたように、二一世紀の変動予測を含めた実証研究は一人の作業で完結するものではない。研究の相互交流と蓄積が今こそ求められている。その問題提起の大きな節目となる著書である。著者に敬意を表したい。

Ayako HOSODA

Darstellungen der Parabel vom barmherzigen Samariter

Michael Imhof Verlag, Petersberg, 2002

176 pp. Euro 49.80

出 村 み や 子

本書は、ルカ福音書の「よきサマリア人」の譬えの図像表現の変遷を研究した博士論文として、一九九九年夏にハイデルベルク大学のオリエント学および古代学部に提出されたものに手を加えた形で、昨年ドイツの Michael Imhof Verlag 社より『よきサマリア人の譬えの図像表現』（国際建築史および芸術史研究一三）として刊行された研究である。文中には、著者がドイツに留学中に収集した「よきサマリア人」の譬えをモチーフにした六世紀から一八世紀にかけて成立した貴重な図版六一点が収録され、表紙の裏表にも美しく彩色された中世の写本が配置されているところなど、全体的に中世の聖書写本の雰囲気漂わせる美しい装丁の研究書である。

とりわけ読者の目を引くのが表紙であろう。ここには本書の表題中のサマリア人の冒頭の S の文字に、ロンバルドゥスの『命題集』第四巻の一三世紀の写本のフォリオ 166v の文頭に配された、出だしの装飾文字が効果的に用いられている。本書の一〇四頁の解説によれば、「よきサマリア人」の譬えはロン

書評と紹介

バルドゥスのサクラメント理論の根本思想となっており、サマリヤ人が油とぶどう酒を用いて行った傷ついた人の世話は、目に見えるしるし、すなわち神による人間の罪の赦しのサクラメントとみなされているという。サマリヤ人の最初の装飾文字のSイニシャルには「よきサマリヤ人」の譬えの二つの場面が上下に見事に組み合わせられており、上部には二人の盗賊による襲撃の場面が、下部には襲撃された人を宿屋に送ってゆくサマリヤ人が描かれている。Sのしるしに沿って物語の方向が規定されており、上部の場面では一人の盗賊が右から来ているのに対して、下部の場面ではサマリヤ人は左から来る形で彼と対置されているという。罪の到来と神による赦しの到来を対比的に示す巧みな構成となっている。

本書は、このように豊富な図版によって中世の人々の宗教性を感じ得ることのできる貴重な資料である。近代絵画では譬えがそのまま絵画として表現化されることが多いが、譬えの事例が指し示す倫理的、神秘的意味の次元までもが図像に表現され、またそのようなものとして図像が受容されていた中世世界の宗教性の諸相に接近できるように本書は読者を導いてくれる。

本書の内容を概観するために、目次の部分を和訳すれば、次の通りである。なお、目次には全体で二頁にわたる細かな区分が挙げられているので、以下では章立てのみに限定して細部については省略させていただく。

第一章 序論

この研究の対象と目的

研究の立場

第二章 多様な芸術ジャンルにおける譬え表現の流布

福音書における譬えの地位

テキストから図像への変換のための導入的考察

キリストの譬えの絵画的表現の概観

第三章 よきサマリヤ人の譬えの文献資料

よきサマリヤ人の譬え

よきサマリヤ人の譬えの釈義的文献—東方の伝承、

西方の伝承

第四章 よきサマリヤ人の譬えの西方および東方の絵画伝承の概観

概観

第五章 サマリヤ人の譬え…多様な意味の分析

さらに「まとめ」と「注」が続き、次に第八章として、これまでに知られている「よきサマリヤ人」の譬えの図像化のカタログが補足として掲載され、ここには挿し絵や壁画、ステンドグラス、彫刻、小作品といった様々な種類の芸術作品が区分されている。このカタログの重要性について著者は、「このカタログによってこの研究は初めてサマリヤ人の譬えの最も重要な形で保持された表現化に関する概観が得られるのだ」(S. 8)と述べている。従って本書は大きく分けると、前半において譬えの伝承について聖書学的、解釈学的、図像学的視点から考察した分析的部分と、後半の第八章以下において、この研究のな

かで扱われた図像資料を収録して解説を付与した資料部分に分けられることが分かる。

まず序論において、本書の主題がルカ福音書のよきサマリヤ人の譬えの図像表現の変遷を、古代後期・初期キリスト教から、西欧中世、ビザンツ中期、後期、ビザンツ後までの図像作品において辿る研究であることが示される。次に本書の目的として示されているのは、第一にテキストと図像表現の関係に関して、イコノグラフィの分析と譬えの図像化の意味を分析することであり、聖書テキストないし釈義のテキストがどのように視覚メディアに転化され、いかなる解釈の可能性がこの伝達過程の中で生じるのかを論じることであるという。第二に、個々の図像の解釈の分析によって、なぜサマリヤ人の譬えが図像の主題として一定の関連において選ばれたのかという問題を解明することであり、そのために聖書テキストと並んで聖書釈義のテキストが採り上げられる。その理由として著者は、「なぜなら一定の動機ないし場面の選択は、個々の表現がその聖書的典拠から逸脱することと共に、解釈学的伝統の認識によってのみ、十分に解釈されうるからである」(S.8)と述べている。

分析の過程で著者が強調するのは、とりわけサマリヤ人の譬えに二つの表現化の方法を区別することができるということである。すなわち聖書テキストに忠実な表現化と、聖書テキストに忠実でない、もしくはテキストから逸脱した表現化である。特に聖書テキストからの逸脱とみなされる図像表現が多く生まれた背景には、聖書のアレゴリー解釈や、それと密接に結びつ

いたタイポロジーの伝統の影響が考慮されねばならない。従って本書は、「よきサマリヤ人」の図像の解釈史であると同時に、図像化に反映された「よきサマリヤ人」の聖書伝承の解釈の諸相を辿る研究でもある。本書の独自性は、「よきサマリヤ人」をモチーフにした一連の図像の考察を、その時代における聖書の釈義的伝統と具体的な図像表現との関りに焦点を当てて研究している点にある。

次に第二章で、譬えの表現化が様々な芸術の類型において、墓碑芸術、教会空間、挿し絵といった具体的な作品例において考察される。第三章では、図像表現に影響を与えた文献テキストの問題が論じられ、まずルカ福音書における譬えのテキストとその解釈が検討され、続いて図像伝承に影響を与えた釈義的伝承が、東方の伝統と西方の伝統に分けて検討される。著者はその際に、よきサマリヤ人の譬えの図像化の背後に、オリゲネスからアウグスティヌスまでに共通に見られるアレゴリー解釈の伝統があったことを指摘している。第四章では、視覚的表現に対する多様な可能性、動機、場面が選ばれ、考察され、それらの芸術的な諸伝承が検討される。第五章で、譬えの図像化をもたらし聖書解釈の問題が多様な視点から分析される。聖書解釈は教会史の中で多様な展開を遂げており、それらは図像に大きく反映している。本書では「よきサマリヤ人」の譬えの解釈の方法として、倫理のおよび範例的次元、アレゴリー的次元、タイポロジー的次元、キリスト論的次元、終末論的次元、救済史的次元、ないし救済論的な次元における解釈が、その時代に応じて個々の図像に反映していることが示されている。聖

書評と紹介

書テキストとの関係で見れば、ルカのテキストの字義通りの意味から倫理的、終末論的な解釈が引き出されたのに対し、テキストを離れて言葉の意味を拡張していったのがアレゴリーおよびタイポロジー的解釈であった。

テキストに忠実な図像と、アレゴリーおよびタイポロジー的解釈の双方を併せ持つ興味深い例として考察されているのが、『ビートル・モラリゼ (Die Bible moralisée)』である (S. 59-61, カタログ 13, 14)。この写本には聖書テキストと、これに対するアレゴリーおよびタイポロジー解釈を含む注解が、それぞれに対応する一組の挿し絵と共に描かれている。聖書テキストの挿し絵が聖書の字義通りの図像を表現しているのに対して、注解部分にはアレゴリーおよびタイポロジー的な図像が多く見られるが、それはこの書物が世俗の非聖職者の教育を目的としていたために、道徳的、教育的機能が重視されていたためであるという。さらに『ロッサーノ福音書』の写本に見られる譬え図像にも、語り手であるはずのイエスが、譬え図像のなかに主人公として登場し、ここに強盗に襲われた人を介護するサマリヤ人として、十字架の印の入ったニンブスを持ったキリストが描かれている (S. 52-54, カタログ 16)。この図像には、サマリヤ人をキリストとみなすアレゴリー解釈が反映しているのである。

聖書と美術史のギャップが最も痛感されるのは、著者も指摘しているように、従来の美術史の研究が聖書の題材をモチーフにした作品を扱う際に、その出典箇所を挙げるに留まってい

まい、立ち入った分析には至らない点である。確かに、キリスト教図像学に聖書および聖書解釈学の知見を取り入れた総合的な研究は、すでにマリア論の分野でかなりの研究の蓄積があり、復活をテーマとした研究にも両者の視点は不可欠になっている。日本でも『キリスト教美術図典』(柳宗玄・中森義宗編、吉川弘文館、一九九〇年)には、旧約聖書と新約聖書に収録された主要な記事を図像化した作品を丹念に網羅して、図像学と聖書を連携させる試みが見られ、また昨年に刊行された『岩波 キリスト教辞典』(大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃編、岩波書店、二〇〇二年)にも、主要な聖書の主題について、神学的観点からの論述のみならず、美術の項目が設定されて、図像学的視点からの詳しい考察が組み入れられている。しかし、典礼の発達に伴って重視されるようになった一連のイエス伝のサイクルに属する図像とは違い、視覚化された作品例が極めて少ないイエスの「譬え」の図像化にテーマを絞って丹念に検討した研究はほとんど例がないだけに、本書は図像学的分野の研究として特筆すべきである。しかも、それを聖書解釈の諸相と結びつけて論じようとした意欲作であるといえる。著者が述べているように、「よきサマリヤ人」の譬えの表現化に関する研究としては、一九五三年の O. Schrammen の未刊の博士論文があるのみであり、この研究においては古代後期―初期キリスト教時代から中世盛期までの二九の図像の例が引用されているという。絵画的表現化とその時代毎の積義的伝承との関わりに焦点を当てて考察を進めている点など、本書は基本的にこの先行研究に多くを負っているものの、扱う時代をビザンツ

後にまで拡大し、図像の収録例を六一作品に増やすなど、本書には大きな発展が認められる。特に、聖書の記述に忠実な図像表現と、聖書テキストから離れて、その時々々の聖書解釈の方法を反映させた図像表現を区別して分析を進めた本書の方法論は、聖書解釈学の分野にも新たな光を投げかける可能性を持つ。

しかし、聖書を題材にした図像の研究に、聖書解釈の伝統の展開に関する詳しい検討が不可欠であることを強調しているこの研究には、文献学の観点から見て疑問に思われる箇所がある。それは、この研究の主題と密接に結びついた聖書解釈の変遷を辿った第三章、特にオリゲネスをその端緒とみなすアレゴリー解釈を論じた部分である。著者は「よきサマリヤ人」のテクストのアレゴリー解釈の例として、オリゲネスの『ルカ福音書ホミリア』三四を引用しているが、その扱い方に問題があるように思われる。実際にオリゲネスのテクストを読めばわかることであるが、まずオリゲネスはよきサマリヤ人の譬えの解釈を展開する以前に、彼より以前に存在していたこの箇所に関するアレゴリー解釈を引用している。

「長老の一人がこの譬えを次のように解釈することを望んだ。下っていくのはアダム。エルサレムは楽園、エリコはこの世である。追い剥ぎは敵対する力。祭司は律法、レビ人は預言者、サマリヤ人はキリストである。傷は不従順、動物（ロバ）は主の体、パンドキウム（すなわち厩）は、入りたいと望むすべての人を受け入れるので、教会。さらにデナリオン銀貨二枚は父

と子を意味する。厩の主人は、その世話を委ねられている教会の指導者。さらにサマリヤ人が再び戻る約束をしたのは、救い主の再臨を示す」。

ここにオリゲネスより以前に流布していた「よきサマリヤ人」の譬えのアレゴリー解釈が引用され、オリゲネス自身の解釈はそれを逐一検討する形で慎重に展開されていることは、注釈者たちも指摘している通りである。それを示すのが、本書二四頁の終わりの *Einer von den Presbytern* の表現であるが、著者はこの表現に注意を払っていない。そのような解釈の伝統はオリゲネス以前に既にエイレナイオスの『反異端論駁』第三卷十七章三に、よきサマリヤ人のアレゴリー解釈の痕跡が認められること、さらにその伝承は、アンティオキアのテオフィロスの作とされた書物や、ボストラのティトウスの『カテナ』に収録された聖書解釈に見られ、かなりの広がりがある（Origène, *Homélies sur s. Luc. SC 87*, Paris, 1962, p. 402 脚注1参照）。『ルカ福音書ホミリア』の英訳版の序論にも、「アレゴリー解釈は、すでに教会の中で長年にわたる伝承（*long-standing tradition*）となっていた。オリゲネスは、匿名の先達による「よきサマリヤ人」の譬えのアレゴリー解釈のひとつを引用し、続けてこのアレゴリーに対して少し改善することへと進んでいる」と述べられている（Origen, *Homilies on Luke, Fragments on Luke*, Washington, D.C., 1996）。

オリゲネス自身の解釈については『ルカ福音書ホミリア』三四のテクストでは、長老の一人の解釈が紹介された後に、これにかなりの批判検討を加えた上で独自のアレゴリー解釈が展開

書評と紹介

されている。こちらの部分こそがオリゲネス自身のアレゴリー解釈として引用されるべきであるのだが、本書の引用ではなぜかオリゲネス自身の解釈の部分がごとく削除されている。そして著者は、オリゲネスが批判的に引用したアレゴリー解釈の例をむしろ、オリゲネスからアウグスティヌスまでに共通に認められるアレゴリー解釈の図式とみなす記述を繰り返しているのである。二四頁では「オリゲネスにおいてサマリヤ人の譬えのアレゴリー的な解釈図式が初めて知られるようになり、これが遙かに中世まで繰り返し用いられた」と言われ、さらに七五頁でも「オリゲネスとアウグスティヌスによる解釈は、中世に至るまでの解釈の伝統に支配的であることが明らかに、その知見はサマリヤ人の譬えのほぼすべての聖書に基づく表現化にとっても不可欠である」(S. 75)と言われている。そのために第三章の聖書解釈史の考察の記述が粗雑になり、オリゲネスからアウグスティヌスまでのアレゴリー解釈の変遷を、単に中世の解釈の四段階説としてまとめしまっている。

オリゲネス自身による「よきサマリヤ人」の譬えの解釈は、それ以前の「よきサマリヤ人」の譬えのアレゴリー解釈の伝統をかなりの程度修正したものとなっており、決して単純なアレゴリーの図式を踏襲したものではない。オリゲネスの『ルカ福音書ホミリア』は、その後ヒエロニムスのラテン語訳によって西方に伝えられた。従って、本書で示された「よきサマリヤ人」の譬えの伝承史的発展を東方と西方に分けて記述した部分については、より正確な検討が必要とされるだろう。「よきサマリヤ人」の譬えの画像表現に多様な発展が見られるように、

実際にはそれを生み出した聖書テキストの解釈の変遷に関しても、特に東方と西方との関係において複雑な展開を示している。

最後に、宗教学の分野における本書の意義について述べておきたい。一連の解釈の変遷において、サマリヤ人をキリストと同一視する解釈の傾向が、祭司とレビ人に代表されるユダヤ教指導者への批判を強めることになったのは事実であろう。著者は最後の結論部分で、「テキストに基づいても、図像化に基づいても立証されないが、おそらくここには反ユダヤ主義的偏見がある役割を果たしているかもしれない」(S. 77)と述べて、その可能性を示唆するにとどめている。しかし、教会史の流れから見るとそれは十分あり得ることであり、むしろ反ユダヤ主義の問題は、現在の教父学において重要な争点となっている。著者は、福音書の他の譬えについても、テキストと図像表現との関係を中心として研究を進めているゆえに、聖書解釈に関する検討をより充実させ、今後こうした重要な問題に光を当てる研究を通して宗教学にさらに寄与してほしい。